

自作教材を使用した職業訓練

実効ある技能習得の方法を求めて

東京園芸装飾専門学校 農林系園芸科 吉田 幸夫

概要

観賞用植物を、生活空間（個人の趣味園芸による個人の生活空間を除く・以下同じ）に飾ることは、和らぎ・憩い・潤いなどを演出して、市街地の生活に欠かせない行為である。この行為は本来、植物が生育不可能な場所に配置するゆえに、維持管理技術と、生活行動との調和共存を図る演出とその技法に支えられている。これらの技術技法をわれわれは『園芸装飾技法』と呼び、訓練を継続している。

本論ではまず、市街地の生活空間に必要な園芸装飾技法の意義と沿革を示した。

その訓練として、現実の生き動いている公共空間の中で、実際に役立つ園芸装飾作品を製作することを模索し実現したことを述べた。第1・2回の実施状況を詳述しながら、訓練の要点を紹介し、それぞれ現実の場での訓練の実効性を強調している。

最後に、公共の場での実践訓練が訓練生に誇りを持たせたこと、公共の場を提供し、協力してくださった各位への感謝をもって結びとした。

1. 現状の把握 園芸装飾とその沿革

1.1 園芸装飾とは何か

(1) 商業・公共空間の園芸的ディスプレイ

延々と続く巨大なコンコースを、雑踏に紛れて歩むとき、一隅にしつらえた観葉植物や草花の植え込みに、ふと心なやむ思いをした方もあろう。

喫茶店にドッカーリと座り込みコーヒーをすすって、ふと見やった視線の先に、豊かな緑の植物を見だして、憩いを感じた方も多かるう。本来、人間が活動し生活する建物の中に観賞用の植物を持ち込むことは、生活行動の妨げになるはずである。にもかかわらず、本来植物の生育に適さない人間優先の活動空間に、単に観賞するだけの植物を配置するのは、人間の本能に根ざすものなのであろうか。

身近に置かれた植物に、人間が生きていける自然のシンボルとしての姿を重ね合わせて安堵するのであろう。

ともかくも、こうした需要に応じて、さまざまな場所に植物を配置し、維持管理し続ける技法が園芸

装飾技法である。

生活行動の妨げにならず、それでいて人の目にもとまり、快い感情を抱けるように工夫することも、植物そのものが少しでも元気に長生きできるように計らうことも、あるいはこれらの条件に適合する植物を選択することも、すべて園芸装飾技法の中に含まれる。

(2) 公共の場での規模の大きい作業

園芸装飾技法を必要とするディスプレイなり、演出を要求されるのは、さまざまな商業空間から始まり、公共の建物まで、人が生活行動を行う場すべてと言ってよい。

しかし、個人の生活空間は、個人の趣味性によるところが大きく、経済活動の対象からは除かれるため、ここでは触れない。

極端な場合、公共の場には休日休業はない。それでいて、人間優先の閉ざされた建物の中にある植物は、生きているがゆえに、給水管理に始まり、枯葉・枝の除去、葉の埃落としなどを常時行わなければならない。

まして、配置した効果を上げ持続させるために、これから本論で取り上げるようなディスプレイを行う場合は、本来の生活行動の妨げにならぬように配慮するとともに、衆人環視の中で、可能な限り短時間のうちに作業を行わなければならない。

それは畳の上の水練と同様に、いかに練習を積もうとも、衆人環視中の公共空間での作業は、実際に行うこと以外に習練の方法がないと言える。

本論は、現実の場所を仮想した場面や場所ではなく、職業訓練の場を、実際のさまざまな生活行動が行われている場の中に持ち込んで訓練を行う方法を述べたものである。

1.2 沿革 現況を理解し将来を展望するために

(1) ステイタスとファッション

欧米の文化や文明を取り込むのに急であった時代、明治時代中頃に園芸装飾の前身である『貸植木業』の発生を見ることができる。

それは、珍奇・高価な観賞用植物を配置できるステイタスのシンボルとして利用したこと、そしてその需要に応ずる形でレンタルという形が生まれたことに始まる。

欧米風文化が定着し、同様の市街地が形成されると同時に、ステイタスシンボルとしての需要は、当然ファッションシンボルと変容しながら増加の一途をたどる。

しかし、現在と全く異なるのは、いずれも単に鉢植えであり、珍しく、高価な植物を配置すること、そのこと自体に価値を見いだすという需要動向だったことである。

戦後、昭和40年代頃までこの傾向が主流であった。

(2) ファッションからアメニティへ

高度成長期に入り、観賞用植物も生産体制が整い、流通経路も整備されるようになると、珍奇・高価という錦の御旗は色あせてきた。そしてそれに追い打ちをかけるように、高度成長のツケとも言うべき自然破壊、環境汚染、そして環境保護が問題視されるに至る。自然、環境のシンボルはまさに植物の緑であった。身近に配置された観賞用植物はステイタスでもファッションでもないアメニティシンボルとし

てもはやされるに至る。

単に配置されているだけでなく、生活を共にしていることに存在の重要性が見いだされるとなると、そこには生活環境との調和共存のための技法が要求されるようになるのは、当然の帰結であろう。

さらに、未曾有の不況が配置のための諸条件を厳しく吟味するようになった。また、周知のようにこの不況の中でも唯一成長し続けた産業に『園芸』がある。言うなればガーデニングブームである。

ガーデニングブームによって社会一般の園芸に対する関心が高まるとともに、園芸知識は飛躍的に向上した。

生活空間に存在するだけでなく、アメニティシンボルとしての存在感、人間生活との調和共存が、観賞植物一鉢にも求められる。すなわち、園芸装飾技法なくしては、配置する価値なしという状況が到来しようとしているのである。

2. 現状への対応 訓練の実施に向けて

2.1 求められる訓練の形 経済活動としての園芸装飾技法

当校に課せられているカリキュラム、年間約1800時間のうち、分散して行う訓練は当然実技であり、全体の約4分の3、さらに集合訓練約460時間のうちの約3分の1もやはり実技に関わる訓練である。要するに、園芸装飾技法を体で覚えるということにほかならない。

体で覚えて、その理由を学科で補完することによって、より確かな技能として体に腕に定着させるのが、職業訓練の目的であろう。

しかしながら園芸装飾の分野では、いまだに訓練を行う体系が確立されていない。わずかに、生け花、盆栽などの手法、各地庭園や植物園見学など、園芸装飾を支える重要な要素であるものを、それぞれ断片的に学ぶにすぎない。たまたま関連団体による技能展に協賛出品して、訓練生が作品を展示できるのも、趣味園芸か生け花の垂流のごとき、ごく小品を展示できる程度である。

本来これらを集大成した大型の作品こそが、園芸装飾技法なのであるから、実際に園芸装飾作品を製

作する中で、例えば、

- ・この部分は生け花の手法にある形で構成するとまとめやすい。
 - ・この形は、盆栽で嫌う形と言われ、このように直すと形よく見える。
 - ・この石と植物の関係は、日本庭園でよく用いる手法で『根締め』と言い、安定して見えて良い。
- 等と、それぞれの技法を紹介しながら教えることで、理解を早めることが可能となる。

したがって、何としても現実に通用する大型の園芸装飾作品を、訓練生と共に、公の場で製作できるようにしたい、という願いが高まらざるを得ない。

(1) 現実の公共空間での園芸装飾企画、場所の確保

民営の商業空間では、厳しい経済活動に制約され、1㎡たりとも訓練の場を提供される可能性はない。

もっとも、本論が定着すれば提供を申し出る企業もあるが、逆に個々の園芸装飾業者を圧迫しかねない。こうしたことから、官公庁はじめ公共の場を利用できるよう、さまざまなツテを求めて次のような打診を行った。

園芸装飾の職業訓練のために

- ア ご希望の趣旨の園芸装飾作品を飾って差し上げます。
- イ 来訪する方々の目にとまる場所、最低約2㎡の床面積をご提供ください。
- ウ 1～2カ月に一度、作品周辺での製作撤去の時間、約3時間をご提供ください。
- エ 製作費用は頂戴しません。
- オ 維持管理は当校で行います。
- カ 製作撤去維持管理の都度、ご都合をうかがい、報告をします。
- キ その他問題ある場合は、その都度お打ち合わせのうえ、対処します。

一挙にこれだけの項目がまとまったのではない。打診の都度、この場合は、あの場合、と問題が提起される中でできあがってきたものである。

そして、最終的に農林水産省南口玄関ホールの中に約2㎡の場を提供していただくこととなった。話題として取り上げられてから約半年の歳月が流れ

ている。

(2) 提供された場所での作業計画

当校運営委員会の承認を得たうえで、次のような具体的な作業計画を作成した(順不同)。

- ア 装飾期間は差し当たって1ヵ年。可能であれば再延長。
- イ 訓練生3名を1チームとして、計6チームを編成(出席簿順)。
- ウ 1作品の展示期間を2ヵ月程度とし、製作したチームが維持管理の責任を負う。
- エ 製作は1チーム1作品。したがって、年当たり6作品。
- オ 指導および材料調達は吉田(本論執筆者)が行う。費用の一部は教材費として訓練校負担可能。
- カ 作品の内容は吉田一任(詳細後述)。
- キ 諸連絡は、事務局が行い、まとめる。
- ク 必要ある場合は、助手を採用する。
- ケ 必要に応じて協議決定する。

(3) 作品の内容計画

日本を代表する省庁の玄関を飾るのにふさわしい作品でなければならない。

また、訓練生の能力を勘案したうえで、訓練にも役立つ内容を備えていなければならない。

約2ヵ月の展示期間に耐えられる植物などの選択が必要である等を考慮すると、基本的な原案は吉田が作成しなければならないこととなる。

この原案概要をもとに、製作に先立つ学科訓練の時間を設けて、内容の説明および材料表、積算表などを訓練生と共に完成させる形をとることとした(後述)。

3. 訓練の実施 第1回から第2回の経過の中から

3.1 作品の企画

(1) 台枠の製作

南口玄関ホールの一隅、この辺りに製作してよいと現場で提示されてみると、中央近くでは、通行の状況、例えば陳情者などが大勢到来した場合には、きわめてじゃまな構築物となり得る。逆に、片隅に設置した場合には誰も気づかない。

本来、床面に接して作り付け、移動しないガーデン風の園芸装飾作品が多いが、ここでは固定することで、かえってじゃまにされる可能性が大きいことが判明した。

そこで、図1に示すような台枠を作り、底部にキャスターを取り付け移動可能にした。このことにより、専門業者の床面掃除に際しても、きわめて効果的な働きが認められたのは、ケガの功名であった。

台枠の大きさは、提示された面積に見合う直径1.2mのものである。台枠とキャスターの強度は、中に入るべき植物と関連資材の重量に十分耐えうるものとし、内部はコーキングと塗装でほぼ耐水構造とした。

深さは、約10cm、通常使用する観葉植物小鉢高さのほぼ3分の2が隠れて見えない深さである（後述する地被材との関係から妥当な深さ）。

(2) 題名と材料の選択

園芸装飾作品であるから、それなりの題名を付し、製作者の姓名もつけることとなった（ただし、当事業内訓練校の名称掲出は遠慮した）。第1回は5月初旬製作となるので、平凡な題名ながら『新緑の候』とした。

第2回は7月製作、梅雨明けと夏到来を予感させる観葉植物を主題とした『パイナップルの仲間たち』である。

題名と使用する材料、特に主役である植物の選択は、冒頭に掲げたように、何よりも経済活動としての作品作りであるから、題名に調和する植物ならば価格は不問というわけにはいかない。

可能な限り訓練生のアイデアを生かすよう心がけたが、この経済的価値判断の点から、すべてを経験未熟な訓練生に任せきれなかったし、その意味も後述するように学科時間の中、積算の場面で納得できるようにした。

(3) 製作（撤去）と維持管理作業の日程と担当者の決定（概要表1）

製作チームは、公平を期して表1のごとく出席簿順に3名ずつとした。

製作日は原則として、奇数月の月初金曜日を当て、現場の都合で前後する場合もあり得るとし、最低1ヵ月前には決定しておくようにした。該当日が、不都合な者は申告のうえ、訓練生同士で交替する場合、参観・手伝いも申告のうえの自由参加として認めた。

維持管理作業は、製作日から7～10日ごとに、製

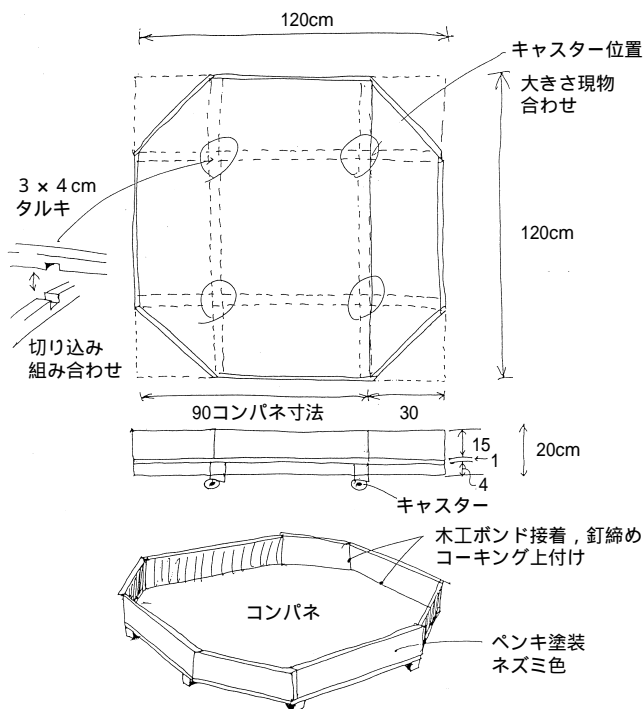


図1 台枠寸法概要

表1 作業予定案

日 程		
第1回製作	5月14日(金)	佐藤、町田、桃井
給水管理	6月上旬、下旬	
第2回製作撤去	7月2日(金)	河野、高柳、村上
給水管理	8月上旬、下旬	
第3回製作撤去	9月10日(金)	飯田、佐野、鈴木(和)、平井
給水管理	10月上旬、下旬	
第4回製作撤去	11月5日(金)	垣花、鈴木(洋)、日山
給水管理	12月上旬、下旬	
第5回製作撤去	1月14日(金)	江沢、桑原、長岡
給水管理	2月上旬、下旬	
第6回撤去	3月10日(金)	大和久、染宮、山口
第7回予備(?)	状況によって、3月10日製作。4月に入って撤去作業を行う場合(農水省と打ち合わせのうえ)	
作業予定		
1. 該当日 AM 7:30 東海農園集合。必要な材料をトラックに積み込む, 8:00発。10:00 農水省着, 挨拶。10:00~11:00 製作(および撤去)。正午 帰着, 解散。		
2. 給水管理日は特に定めない。担当班員のうちで都合をつけ、現場に赴いて手入れを行い、その旨報告すること。		
3. 担当班員のうちで都合により交替は認める。ただし、1回はそれぞれの作業を行うこと。		
4. 給水管理に赴いた結果、植物などの損傷を認めるときは、その旨報告して善処する。		

作を担当した者が、現場に赴き作業することとし、チーム構成員同士で交替して行える日取りを決定し、事務局に申告するようにした。

維持管理作業の日取りを概略の間隔としたのは、訓練生の所属する勤務先の都合で、霞ヶ関付近を通過したり、その近辺で営業行為を行う都合に合わせたゆえんである。同時に、維持管理作業はこの間隔よりさらに細かく行ってよいことはあっても不都合はなく、連絡のうえ、随時参上してもよいこととした。

(4) 完成予想図，材料表，積算表の作成と検討場所，内容，製作日時手順等が決定してから，製作に関わる学科時間を設けた。

本，序論に述べたことに始まり，当日の心得，服装，集合場所等に至る作業そのものの説明とともに，作品の内容について講義を行った。製作されるべき作品については，図2を参照されたい。

特に，経済活動としての園芸装飾作品であることから，実際にどのくらいの見積金額となるかを，使用する材料それぞれの説明とともに検証を行った。

ここで特に強調したのは，上代価格（仕入れ価格に必要な価格を上乗せした販売価格）による材料と，人手トラック代だけで作品は生まれないことである。

あらかじめ説明した製作に至る経緯と作品の企画立案の費用をどのように評価し，計算に入れるか。

訓練生が搬入出に使用するであろう植物等を載せる台車や資材を入れたコンテナの費用（償却費）を計算に入れたか。

材料として書ききれない微細・少量の物品を雑費としてどのように計上するか。

これらが，社会常識上許される範囲で計上されて初めて作品ができあがることを理解させたいのである。結果として，材料そのものの合計金額をAとすれば，総費用はおおむね $3 \times A$ ，すなわち3倍となった。

製作担当者は当日，これら予想図，材料表を忘れずに持参することを伝えて，学科授業を終了した。

3.2 製作(撤去)作業 材料の準備から片付けまで

作業に当たっては，可能な限り指導，指示の範囲

パインアップルの仲間たち
平成11年7月 農水省展示「園芸装飾作品」
東京園芸装飾専門学校第24期生第2班

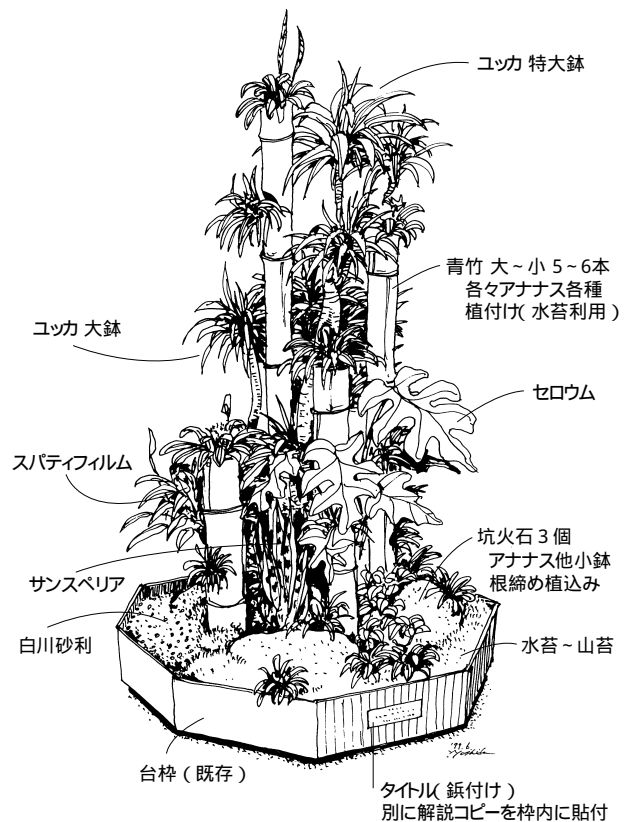


図2 完成予想図と概略の指示

でとどめ，訓練生自身が考え行動できるようにした。

(1) 準備と積載

あらかじめ，積載すべきトラックとその周辺に集積場所を設けておき，そのうえで指示を行う。

材料表と予想図に示された資材のすべてを，在庫してある場所（概略の位置を指示済み）から選別し，積載場所に種類別にまとめ集めるようにした。

積載順は，大きい物，重い物，等を先に荷台に収めるが，現場到着時最初に必要な物品は，最後部，最後に積載するようにする。

1人に，積載の都度積み込んだ材料の点検・称呼を行わせる。

訓練生3名はトラックで指示した場所へ到着後，現場警備員に挨拶，待機するようにした（あらかじめ氏名，車両番号，車種を連絡済み）。

乗車定員3名のため，筆者は別行動としたが，結果として現場到着までの交通規制の中での判断等，



写真1 主な配置をすまして、パイナップルの仲間をアレンジする（右端、農水省担当者の見物）



写真2 パイナップルの1種。鉢から抜いて、竹筒の中に植える。

1 チーム3名は適当な人数と判断された。

(2) 到着と挨拶

あらかじめ連絡済みとはいえ、営業時間内である。警備員（守衛）、現場担当者それぞれに到着挨拶とともに、作業の適否を確認させる。

きわめて初歩的なことながら、本人の所属、氏名、来意を的確に伝えること、担当者の意向を復唱し実行することなど、儀礼に関わる点も教示しておきたいものである。

(3) 搬入と製作（撤去）準備

第1回目は製作するだけであるが、第2回目以降は、前回の作品の解体撤去作業が含まれる。本論では、製作を詳述し、撤去作業はほぼ省略した。それは特別の場合を除いて、製作手順の逆に解体作業が行われ、順次搬出することで終わるためである。

作業開始の許諾を得てから、第一の作業として、搬入出経路、作業場所の床面や壁面の安全確認や保護を行う。保護シートを敷き、ガムテープで周囲を張り付けて物品搬入出の際に損傷のないようにする作業などであり、すべての作業に優先する。

(4) 製作（撤去）作業（写真1，2参照）

台枠の中に、万一にも水漏れを生じないようにビニルフィルムを敷き詰め、その上に図示された主景物・大きいものから配置し始める。植物にあっては、鉢植えであることがすぐわかる配置ですむならば、はじめから鉢植えだけを並べれば良いのであって、園芸装飾作品とは呼び難い。

ここでは、限られた台枠のスペースの中に、大小さまざまな鉢植えを数多く配置するのであるから、鉢の上に鉢を置いたり、鉢と鉢の隙間に斜めに押し込むなどという方法もよく行われる。いずれにしても全体の形を整えるために、さまざまな工夫が凝らされる。

例えば、大きい鉢の傍らに葉の茂った小さい鉢を置いて、大きい鉢が見えないようにする。その小さい鉢は、周囲に古新聞紙等を丸めて添え、湿らせた水苔や山苔で鉢も古新聞紙も併せて覆い隠してしまう（台枠の深さを10cm程度にしたのも、覆い隠す苔などの地被材の利用が効果的な高さなのである）。

指示した資材を組み立てていく順に、必要な技法をやらせたり、やって見せたりしていく。以下に作業の中の具体的な手法のいくつかを掲げる。

ア 大きい物から小さい物へと配置を組み合わせる。
イ 視線をとらえる草花など、華やかな色彩のものが片寄せらぬようにする。

ウ 濃い茂みとまばらな茂みが交錯するように配置する。

エ 衝撃で落ちたり倒れたりしないよう、見えない部分で支柱や添え木に縛る等をして補強する。

オ パッキングに用いた古新聞紙等は地被材で完全に覆い隠す。

カ 砂利などを用いて余白の部分を設定する。

細かくは指の使い方一つひとつにまで及ぶ技法の指導であるが、ここでも製作する作品の規模と、3



写真3 第2回作品 完成 平成11年7月2日
「パイナップルの仲間たち」

名という人数が、結果的にかなり適切であることを実感している。

衆人環視の中で行う作業であるから、手が空きすぎても、忙しすぎても、作業行動が不自然になり、失敗も生じやすい。

指導者1人、適宜作業を指示しながら、全体の進行状況を把握するためにも、傍らを通行し関心を示し質問する人々への対応時間も含め、緩急自在の範囲は、この辺りの規模と人数の感じである。

(5) 片付け清掃

葉の重なり具合、葉裏が外側に出ているのを直す、台枠からはみ出ているビニルフィルムの端を整える等、細部に至る作業が終了して、使用した器工具の員数合わせ確認と収納の後に、搬入出経路を保護したシートの取り外しと清掃を行い、作業が終了する。

(6) 承認と挨拶（写真3参照）

完成した作品があり、ちり一つない状態で、担当者の点検を受ける。緊張の一瞬である。

承認の言葉でホッとする喜びは、物を作るものでなければ味わい得ないものであろう。

承認の証拠資料として、納品伝票のサインを受け、感謝と別れの挨拶をして退去する。

(7) 帰着と荷下ろし、再配置片付け

作業が終わり、交通渋滞の中を走り、無事帰着した社内では、安堵のあまり意外に小さい事故を起こしやすいものである。十分に注意したい。

持ち帰った植物、資材を従来在庫してあった場所に戻す。特に、持ち帰った植物は、再利用可能なもの、養生回復に手を尽くせば利用できるもの、廃棄処分すべきものなどの区分能力が要求される。手間暇かけて回復させる場所と時間と経費を考えれば、新たに仕入れたほうがはるかに安上がりの場合、逆に高価な仕入れならば手間暇かける必要もあろう。

あるいは、板、針金、紐その他資材の端切れも、可能な範囲で収納しておくことで、次回製作にきわめて有効な雑材である。

例えば、第2回作品に使用した太い竹材は、本年正月に使用した門松の竹を、色あせぬよう暗部に保管してあったものである（もっとも通常はこうしたことを得意先に明かす必要はないのだが）。

それぞれの収納、養生、廃棄など経験的な区分別断能力が問われるゆえんである。

3.3 維持管理作業 分散訓練の中での訓練生の自主性

吉田が訓練生3名と行動を共にし、具体的指示を行うのは製作および撤去の際のみで、維持管理作業は、3名の訓練生の自主管理に任せることとした。もちろん、製作完了時に給水方法の解説や方法をやってみせること、2ヵ月の間には、吉田が適宜参上、担当者に状況説明や意向を聞く機会を設けている。

訓練生の所属する各企業の主な作業が、東京都内全域に広がる得意先に飾ってある観葉植物の交換・維持管理である。訓練生それぞれの勤務先の都合、好意の中でやり繰りのうえ、この現場に立ち寄ることは十分可能である。

3名交替、7～10日に一度、給水管理に行くこととし、詳細は3名一任、結果報告は事務局宛提出とした。

事務局で製作した報告書書式は別紙1のとおりである。

(1) 給散水

飾ってある植物に、ただ水を与えればすむわけではない。まして地被材で覆い、大小さまざまな種類である。激しく乾いて葉が萎れかかったものがある一方、全く乾きもせず元気一杯のものもある。

鉢植え観葉植物の給水原則は、鉢土が乾いたら夕

ップリ与えることである。

地被材を一部はがして乾き具合を点検したり、地被材と詰め物（古新聞紙・前出）の奥で見えない部分は、茎葉の状態を推察したりして与える量の加減をする。

(2) 差し替えと剪定整枝

2ヵ月の間には、飾った植物の寿命で枯死するものも出てくる。特に、寿命の短い草花類は、当初から途中差し替えを予定に入れ、見積金額にも計上する。

これらの作業も重要な維持管理作業である。また、枝葉の先から枯死したものは、その部分のみ剪定という方法もとられる。

いずれも、作品の傍らにちりの四散を防ぐ小ぶりのシートを敷き、その上で手早く処理することが望まれる。

予定外の枯死発生は、直ちに現場当事者と事務局宛報告、次期管理を早めたりして対応することとし

ている。

(3) 内容報告（伝票）(別紙1)

上述の報告書に、参上した訓練生が必要事項を記入のうえ、現場担当者に提出、証拠の押印を受けることとしている。

これは単に本件の手続き上の問題だけでなく、社員の接客態度や通常取引の場合の納品伝票授受と全く同じ意義を持っている。

さまざまな職業の営業担当者が、顧客との接触場面を設けることに苦慮する中で、7～10日に一度は、いや応なく顧客と接触できることは、またない営業のチャンスが与えられていると言っても過言ではない。

4.まとめ 園芸装飾技法の出番

仮に、快適便利安全であるはずの市街地や建物から、観賞用の植物を取り払って見たら、コンクリート砂漠そのものを見る思いをするであろう。

とはいえ、このような植物が本来生育できない環境に観賞用の植物を配置することは、人間が面倒を見てやるのが前提条件である。それも、趣味園芸のごとく植物を愛培すること自体が目的ではなく、人と植物が市街地の中で調和共存することこそが目的である。

その目的に沿った技法が、ほかならぬ園芸装飾技法である。

ここでは、農林水産省という願ってもない省庁の担当者の好意によって得られた、公共の場での園芸装飾技法訓練の一部始終を論じたが、本論を書く時点では、いまだ2回4ヵ月を経過したばかり、全くの緒についたばかりである。

幸いに、この作品が飾られた場所がきわめて好評で、椅子が新たに並べられたり、来庁者の格好の休憩、待合わせ場所として定着し始めたのは、製作に携わる訓練生各自の大きな誇りとなり、何よりもの訓練効果でもあろう。

おわりに、訓練の場を与えてくださった農林水産省担当各位、前代未聞の訓練活動を許諾してくれた運営委員会各位、さまざまな事務手続きをまとめてくれた事務局各位に心から感謝申し上げます。

農林水産省農産園芸局 果樹花き課 花き対策室 御中		東京園芸装飾専門学校 〒141-0022 東京都品川区東五反田 2-3-4 TEL. 03-3473-6552 FAX. 03-3473-6553	
維持管理作業確認書			
作業日時	作業者氏名	施主	事務局
平成 年 月 日 午前 午後	第 班		
作業項目	作業内容	確認	
灌水（水やり） 設置期間中の植物維持管理 設置場所の換気・空調・来庁者数に注意	植木の鉢土		
	花鉢の鉢土		
	植物の表面		
枯葉等不要物の除去・剪定 設置期間中の植物の状態・美観の維持管理	枯葉の除去		
	枯花の除去		
	枯枝の除去		
	不要枝の剪定		
構成・位置の確認 鉢物・構成物のバランス・安定性等全体の確認 鉢・パッキング材などの露出に注意 人為的な外部の力を受けても安定していること 設置場所の移動は、施主の指示を受ける	植物の配置		
	植物の入れ替え		
	竜木の配置		
	点景物の配置		
	水苔等の鉢覆い		
	安定性の確認		
	設置場所の確認		
清掃 ゴミの除去等美観の維持管理と共に、灌水時の水の飛散や漏水に注意	ゴミの除去		
	葉面の清掃		
	台枠・鉢の清掃		
	設置床面の清掃		
その他特記事項			

別紙1